変態

 　　Puney　Loran Seapon

　「……そうですか、分かりました。お忙しい中、ありがとうございます。」

　そう言って、新米刑事のはマンションをあとにする。この近くで変質者が出たので、彼はその捜査にあたっているのだ。だが、通報があってから今日で五日目、一日一人ずつ、計五人もの人間が被害に遭っているにもかかわらず、手がかりは何一つない。被害者の証言によると、夜だったので、顔はよく見えなかったが、変質者は典型的なトレンチコートタイプの男だそうだ。現場は毎回このマンションの近くなので、いい加減何か手がかりが見つかっても良さそうなのだが。

　朝から飲まず食わずで聞き込みをしていたので、流石に腹に何かを入れないと倒れそうだ。そう思った勇気は、近くの公園で、昼食をとることにした。

　「さあ、僕を踏むんだ！　いや、この卑しい僕を踏んでくれ！」

　公園の近くまで来たとき、勇気の耳にそんな叫び声が聞こえてきた。聞き覚えのある声なので、慌てて公園まで走る。公園のど真ん中で、男が小学生と思われる女の子に土下座していた。

　「……貴様、捜査中に何をしているんだ？」

　土下座しているのは、勇気の同僚の、

太っているせいなのか、かけているダサい丸縁メガネは白く雲っており、髪の毛もだらしなく伸びきっているが、こんな奴でも警官だ。通称『ブタ』と呼ばれている。しかし、実はブタはかなり清潔で、知能も高い。不潔に思えるのは人間の偏見だ。そのため、彼のことを『ブタ』と呼ぶのは、ブタに失礼だろう。

　「見て分からんのかね！　彼女に踏んでもらいたくて、土下座しているのだよ！」

　「なら、俺が踏んでやらぁ！」

　そう叫ぶと、勇気はブタ……じゃなくて康介の頭を思いっきり踏みつける。康介の頭が、地面にめり込んだ。

　「勇気君……ちょっ……ちがっ……」

　「お嬢ちゃん、ごめんね。さあ、ここには変なおじさんがいるから、遊ぶなら向こうで遊んでくれるかな？」

　「はぁーい！」

　元気よくそう言うと、女の子は康介の頭を軽く踏んづけてから、向こうへと走っていった。

　「さて、お前はこっち来い」

　「うごっ……」

　そう言うと勇気は、康介を、公園の入り口近くのベンチまで引きずっていった。

　「一体君は何を考えているのかね！」

　ベンチに座った途端、康介は勇気に食って掛かる。だが、それは勇気の台詞だろう。

　「いや、不審者から女の子を守っただけだが？」

　「違う！　文句があるのは、君のさっきの踏み方のことだよ！　いいかね？　人の顔を踏む時は、相手のほっぺの真ん中辺りを、自分のつま先や踵でグリグリとするのが正しい踏み方だ。頭の上から踏むなどとは、言語道断！　君のせいで、さっきの女の子が間違って覚えてしまったではないか！　どう責任をとるつもりかね！」

　「いや、責任をとる必要はないだろう。と、いうか、いい加減にしないと、そろそろセクハラ等の罪で訴えられるぞ？　お前、昨日近藤さんのデスクの上にあったペットボトルをラッパ飲みしていただろう」

　『近藤さん』というのは、警視庁一の美人さんである。そんな人のペットボトルをラッパ飲みするとは、なんという奴だろうか。

　「この間は更衣室の壁に覗き穴を開けようとしていたし、その前は酔った勢いで高橋さんの体にベタベタと触っていたし、そして一ヶ月くらい前は……」

　「ええい、五月蝿い！　と別れた僕の気持ちが、リア充の君に分かってたまるか！」

　奈津美というのは、康介の元カノで、勇気も何度か会ったことがある。少し気が強いが、中々可愛らしい子だったと勇気は記憶している。と、いうか、こんな男にも彼女はできるのか。

　「いや、リア充だと言われてもな。少なくとも、お前が思っているような意味合いでのリア充ではないぞ？　彼女いないし、できそうな予感もしないからな」

　「では、そのお弁当は何かね？　君の幼馴染の、奈津美と同じくらい可愛いまゆみさんが作ってくれたお弁当ではないか！」

　康介は、勇気の膝の上に広げられたお弁当を指差して叫ぶ。

　「いや、たしかにまゆみのやつが作ったお弁当ではあるけど、それは親が出張で中々帰ってこれないのを心配したまゆみが、ぐーたらな姉貴と、まだ小学生の妹の代わりにご飯を作ってくれているだけであって、俺のは二人のついでだぞ？」

　「嘘をつくな！　前に君の家に遊びに行って夕飯をご馳走になったとき、まゆみさんが君に向かって『べ……別にあんたのために作ったわけじゃないんだからねっ』と言っていたではないか！　典型的なツンデレだ！　それに君のお姉さんは所謂『電波系美少女』だし、ロリ全開の妹は甘えん坊で君にべたべたしている！　そんな素晴らしい美少女達に囲まれて、これをリア充と言わずに何と言う？　一番許せないのは、君の妹が、君の……君のことを……うっ、うう」

　康介の頬に涙が溢れた。別にそこまでのことでもないだろう。

　「『おにぃちゃん』だと！　あえて『にい』言わずに『にぃ』と言うところが心憎い！　あの発音にここまで『萌え』があるとは知らなかった！　萌え度パネェ！　勇気君みたいなリア充爆破しろｗｗｗ」

　「いや、なんだよそのダブリューダブリューダブリューってのは！」

　「なんだ、ネット用語を知らんのか？　『(笑』を略したものだよ」

　「少なくとも現実で使う言葉じゃないのはわかった。と、いうかブタ！　誰が爆破しろ、だ！　お前が爆破しろ！」

　「ブ……ブタだと！　言ったな！　親父にも言われたことないのに！　それに僕は飛べないから、ただのブタじゃないか！」

　版権の仕組みが、調べてもあやふやでよく分からないのだが、今の康介の発言は危ない感じがする。

　「ただのブタじゃねぇ！　変態ブタだろうが！　自覚持て！　と、いうか、そろそろ捜査に戻るぞ！　ブタもさぼってないで仕事しろ！」

　「ま……またブタって言ったな！」

　こうして、言い争いを続けたまま二人は公園をあとにした。

　「……そうですか、分かりました。お忙しい中、ありがとうございます。はぁ……」

　勇気の口から、溜息が漏れる。場所はさっきのマンション。かれこれ三時間、聞き込みを続けているが、未だに大した手がかりはない。まぁ、溜息の理由はそれだけではないのだが。

　「……っすか。……りました。……あざっす」

　康介の口からは、駄目な若者の返答の典型的な例が聞こえる。『ありがとうございます』くらい、ちゃんと言うべきであろう。

　「あのブタ野郎……」

　放っておくと、またさぼりそうなので、一緒に聞き込みをすることにした勇気だが、彼の判断は間違っていたと言わざるを得ない。警察の印象を悪くするだけだ。

　注意しようと、勇気が康介に近づこうとした時だった。

　「そうですか！　いやー助かりました。ありがとうございます！」

　後ろから聞き覚えのある声がしたので振り返ると、白衣を着た男が主婦に向かって頭をさげていた。彼は科捜研の。勇気の中学時代の友達だ。一体彼は何をしているのだろうか？

　「おい、藤二。何やってんだ？」

　「あれ、勇気君かい？　いい天気だね」

　「藤二、質問に答えろよ……」

　「やだなあ勇気君。『藤二』なんて水臭いじゃないか。昔みたいに『ＴＯＵＪＩ』って呼んでくれよ。」

　「一度もそう呼んだことはねぇよ！　『呼ぶ』っつうか、『読む』の間違いだろう。音的には同じだ！」

　「全然違うよ。『藤二』の場合は『とうじ』て読むけど、『ＴＯＵＪＩ』の場合は『ト・ウ・ジ』っていう風に音を溜める感覚で」

　「いや、意味わからん」

　ところで、本当に『ＴＯＵＪＩ』いや、藤二はここで何をしているのだろうか。

　「藤二。本当に何やってんだ？」

　「君たちの手伝いさ。変質者の事件の聞き込みだよ。」

　「科捜研の仕事じゃねぇだろ。職場戻れ」

　勇気の言うとおりだ。科捜研には科捜研の重要な仕事がある。それをほっぽらかすとは、職務怠慢もいいとこだ。

　「勇気君、『天才は時として、何もしない方が良い結果につながる』という名言を知らないのか？」

　「知らねぇよ！」

　『名』言というよりは『迷』言だ。結局のところ、彼はたださぼっているだけである。

　「おやおや、誰か知っている人の声がすると思ったら、『ＴＯＵＪＩ』君じゃないか。久しぶり。(￣Д￣)ﾉ」

　話し声が聞こえたのか、康介が聞き込みを中断して勇気達の方へやってきた。

　「ブタ、だからネット用語を現実で」

　「やあ康介君。久しぶり」

　藤二が勇気の発言の上からかぶせるように康介に挨拶する。どうやら二人は知り合いらしい。

　「おや『ＴＯＵＪＩ』君。勇気君と知り合いなのかい？　(ﾒ・ん・)？」

　「ああ。中学時代の友人さ。君も勇気君の友達だったんだね？　知らなかった」

　「うむ、同僚だ。よかったら、中学時代の彼の話をｋｗｓｋ聞かせてくれないか？　（^人^）」

　「よし、じゃあこの近くの喫茶店でどうだろう？　彼の調子に乗りすぎて恥ずかしさ満載の中学時代を、面白おかしく話してあげよう」

　「いや、ちょっと待て！　仕事しろよ！」

　楽しそうに話しながら喫茶店へ向かおうとする二人を勇気は慌てて引き止める。

　「勇気君。仕事仕事と五月蝿いなぁ。人生には遊びも必要なんだぜ？」

　笑顔で藤二はそう言った。

　「それは仕事を頑張ったやつに言う台詞だろう。さぼってるやつが言う台詞じゃねぇ。ところで、お前のさっきの主婦に対する発言が気になったんだが、もしかして何か掴んだのか？」

　「ああ。変質者の特徴を話したら、一昨日の夜、それっぽい人見たってさ」

　「は……早く言えよ！　どんな奴だっ！」

　「こらこら、何にでもすぐ答えを求めるのは、現代人の悪い風潮うごぉ……」

　「いいから早く話せ」

　勇気が藤二の首を締める。

　「わ……分かった、は……話すから……」

　藤二が両手を上に挙げたので勇気は手を離す。藤二はさっきの主婦から聞いた話を、勇気に話し始めた。

　「……じゃあ彼女は、このマンションの一階に住んでいる浦田ってやつが、真夜中にトレンチコートを着て、出かけるのを見たんだな？」

　「あ……ああ」

　「よし、ブタ、藤二、今からその浦田ってやつのところにいくぞ！　重要参考人として引っ張ってやる！」

　「む？　勇気君、今からかね？」

　「康介君の言うとおりだよ。犯行は毎回真夜中に行われているんだから、それまで待ってもいいんじゃない？」

　かっこよく台詞をきめた勇気に対するアホ二人。当然である。目撃証言があるのだ。これ以上被害者を出さないためにも、さっさと引っ張るべきだろう。と、いうか、この二人は仕事をさぼりたいだけに違いない。

　「バカ野郎、さっさと浦田ってやつに……」

　その時、マンションの外から、女性の悲鳴が聞こえた。三人は慌ててマンションを出る。

　「も……もしや……」

　勇気は、嫌な予感がした。

　「大丈夫ですか？」

　女性はマンションの出口のすぐそばで泣き崩れていた話を聞くと、勇気の予想通り、トレンチコートを着た男が、彼女の前でコートの前をひろげたそうだ。警察が来る音を聞いて、慌てて逃げたらしい。女性は男が逃げた方を指差した。

　「まだそう遠くへは行ってないよねぇ」

　「うむ、急げば追いつける。(ﾟ∀ﾟ)」

　と、二人はそう言った。藤二はともかく、康介は無理だろう。……体型的に。だがここで、藤二が真面目な顔をする。

　「……康介君。前々から気になっているんだけど、君のその喋り方、直した方がいいんじゃない？」

　「おっ、藤二、いいこと言うじゃん。この切羽詰ってそうな空気で言う台詞じゃねーけど」

　だがここで、藤二は太陽のような笑顔を見せた。勇気には、嫌な予感しかしない。

　「もっと斬新な感じがいいんじゃない？」

　「ＫＯＮＮＮＡＫＡＮＮＪＩＫＡＩ？　(ﾒ・ん・)？　ＳＡＡ　ＨＡＹＡＫＵＩＫＯＵ！」

　「いや、違うだろ！　つーか、かっこわるっ！　なんでローマ字なんだよ！　余計分かりづらいわ！　せめて英語で話せよ！　そもそもこんなことしている暇ねーし！　早く犯人追うぞ！」

　勇気はそう怒鳴って、犯人の逃げた跡を追った。

　「待てごらぁ！」

　運良く犯人である浦田の姿を見かけた勇気は、そう叫びながら犯人を追いかける。だが、待てと言われて待つ犯人はいない。それでも待てと言ってしまうのは、なぜだろう？

　「い……いやだぁぁぁ！」

　「五月蝿い！」

　そう叫んで、勇気は浦田に飛びついた。

　「うわぁぁぁ！」

　「よっしゃ、捕まえ……うごはぁ！」

　地面に浦田を押し付けた勇気だったが、腹に蹴りを入れられて、思わず押さえつけていた手を離してしまった。

　当然、その隙に浦田は逃げる。だがその行く手を、藤二と、まさかの康介が阻んだ。康介は体型的に無理そうだと思ったが、どうやら全然そんな事なかたようだ。

　「ぐ……しまった！」

　「ふっふっふっ、先回り作戦、成功！　どうだね、勇気君」

　康介が、ドヤ顔で勇気を見下ろした。

　「よくやった、藤二、ブタ。さあ浦田、もう逃げられんぞ？　大人しくするんだ」

　「嫌だ！　全世界に僕の美しい肉体を見せつけるまで、僕は捕まるわけにはいかない！」

　「一体、何が君をそんなに駆り立てるんだい？」

　藤二が、当然の疑問を浦田に尋ねた。

　「僕は……僕は目立ちたいんだよ！　脚光を浴びたいんだ！」

　「やめろ、そんなことをしても、誰も君になんか注目してはくれないぞ！　愚か者として、人の目を避けるような生活をしなければならないんだ！　それでもいいのか！」

　「誰も注目してくれない？　だったらこれを見ろ！」

　そう叫んで、浦田は着ているトレンチコートを脱いだ。これは男の前でやる行動じゃないだろう。勇気は頭を抱える。

　「ば……馬鹿な……！」

　「こ……これは……！」

　勇気が顔を上げて見ると、康介と藤二は、衝撃を受けたような顔で浦田の体を見ていた。だが、二人は勇気と違って、脱いだことに対するショックを受けているわけでは無いようだ。衝撃の発言が二人の口から漏れた。

　「う……美しい……」

　「こ……これは、生けるダビデ像……！　いや、ダビデを超えている！」

　「ダビデ超えｷﾀ━(ﾟ∀ﾟ)━!」

　「この世にこんな美しいものがあったとは！　かはっ！」

　「お前ら……正気か？」

　地面に手をつく二人を見て、勇気が冷ややかな目線を送る。確かに腹筋は引き締まっているが、それ以外に特筆すべき事は何もない。衝撃を受けるほどじゃないだろう。藤二に至っては血まで吐いているが、一体何があったのだろうか？

　浦田はトレンチコートを着直して、二人の間を抜ける。

　「何やってんだお前ら！」

　「待ってくれ浦田！　その腹筋で僕にボディープレスを……」

　「馬鹿っ！　早まってんじゃねーよ！」

　血迷う康介を、勇気は怒鳴り、康介の頭を踏みつける。

　「さっさと追いかけんぞ！」

　「す……すまない勇気君。僕たちは立ち上がれそうもない。君一人で追いかけてくれ！　これを持っていくんだ！」

　藤二はそう言って、白衣のポッケから、時計を取り出し勇気に投げた。

　「僕の知恵と技術の総力を結集した発明品だ。その名も、『時計型銃』だ！」

　「なんかすげーパクり臭がすんだけどっ？　版権とか大丈夫かっ？」

　「使い方は、文字盤のとこの照準スクリーンを上げて、狙いをさだめ、脇のスイッチを押せ！　一日一発限りしか撃てないから、絶対に外すなよ？」

　「使い方までそっくりだな！」

　「早くしろ！　浦田が逃げてしまう！」

　「分かったよ！」

　そう言って、勇気は時計を腕につける。そして、照準スクリーンで狙いを定めた。『銃』というくらいなので、モロに当たったらまずいだろうと思った勇気は、浦田の足のあたりを狙うことにした。そして、スイッチを押した。

　ズキュゥゥゥゥゥゥン

　そんな音がして、浦田の目の前の地面が爆発した。その威力に吹っ飛んだ浦田は無事だったが、地面には大きなクレーターが出来ていた。

　「うん、完璧！」

　藤二は満足げに頷く。

　「いや、『完璧！』じゃないだろう！　人間相手に使う道具じゃねぇ！　どーすんだ、あれ！」

　「始末書(ry」

　衝撃から立ち直った康介が、勇気の肩にポン、と手を置く。だが、始末書だけでは済まないだろう。

　だが、何はともあれ、浦田は無事、公共わいせつ罪の現行犯で逮捕され、事件は幕を閉じた。

 　　【あとがき】

　お久しぶりです。　Puney　Loran Seaponです。製本版を購入されていない方は、本当に久しぶりですね。

　今回はコメディーを書きました。プライベートでも、たまにコメディー色が少しだけ強い作品を書くことがあるので、書く前は、「コメディーなんて簡単楽勝！」などと思っていましたが、いざやってみると、何と難しいことか。自分以外の人を笑わそうとするのって、非常に難しいんですね。コメディー作家やお笑い芸人の偉大さに気づかされました。

　一応、下ネタ表現には、これでも大夫気を使ったつもりですが、気分の悪くなった人、本当に申し訳ありません。

　次回は、恋愛ものを書きましょうかね？　それでは、また！